

平成25年12月7日(土) 15:00~16:30

北日本新聞ホール

「海がつなぐ日本海文化」

コーディネーター

今村 弘子 氏 (富山大学極東地域研究センター 教授)

パネリスト

武田佐知子 氏 (大阪大学大学院文学研究科 教授)

藤田富士夫 氏 (敬和学園大学人文社会科学研究所 客員研究員)

小野 洋 氏 (環日本海環境協力センター (NPEC) 専務理事)



今村 弘子 氏 (富山大学極東地域研究センター 教授)

(今村) パネルディスカッションの司会を務めます今村です。どうぞよろしくお願いたします。ただ今、武田先生から、日本海をめぐる交易の壮大なお話を伺いました。新潟県にある湊足柵、それから出雲神社が実は交易のランドマークだったのではないかとということ、言葉が通じない者同士の間での交易、沈黙貿易というものがあったのだという話もうかがいました。恐らくこれは無用の戦いを避けるための非常に優れた知恵で、今日的な示唆も含んでいるものではないかと思います。

そういったお話を踏まえて、パネルディスカッションに入りたいと思います。まず藤田

先生には、『出雲国風土記』の発掘された遺跡、古代の日本海をめぐる交流の話などをしていただきたいと思います。藤田先生と小野先生それぞれに20分ずつお話をさせていただければと思います。よろしくお願いします。

報告1 「海がつなぐ日本海文化」

藤田 富士夫 氏（敬和学園大学人文社会科学研究所 客員研究員）

1. 『出雲国風土記』の「国引き神話」

（藤田） 私の発表では、主に『出雲国風土記』を中心として見た場合の日本海文化をテーマとしたいと思っています。元明天皇の和銅6年（713）のことですが、それぞれの国ごとに、いろいろな産物や産物、あるいは地名の起こりなどを記録しなさいという命令が出されました。それを受けて風土記の編さんが始まりました。『出雲国風土記』は天平5年（733）に成立したもので、現存している



風土記で、ほとんど完全な状態のものはこれが唯一だと言われています。他にも、かなりまとまったものとしては、常陸国風土記等4編ほどありますが、一番よく整っているのが『出雲国風土記』です。

『出雲国風土記』は、出雲の島根半島の各郡を逆時計回りで記載していますが、最初の「意宇郡」冒頭に、有名な「国引き神話」が記されております。そこには、このように書かれています。「意宇とよぶわけは、国引きなされた八束水臣津野命が詔（みことり）して、『八雲立つ出雲の国は、巾（はば）のせまい布のような幼い稚国（わかくに）であることよ。最初の国を小さく作ったのだな。さてそれでは縫いつくろうことにしよう』と仰せられて、栲蓐（たくぶすま）新羅（しらぎ）の三崎（みさき）を、国の余りがありはしないかを見ると、『国の余りはある』と仰せられて、童女（おとめ）の胸のような大鋤（むなすき）を手に取り持たれて、大魚の鰓（きだ）突きわけるごとくに刻み突きわけ、旗薄（はたすすき）の穂振り分けるごとくばらばらに穂振り分けて、三つ身の太綱打ち掛けて、霜枯れの黒蔓草（つるくさ）をたぐるように、繰るや来るやとたぐり寄せ、河船を運びあげるようにもそろもそろと『国よ来い、国よ来い』と引いて来て着縫うた国は、去豆（こず）の折絶（おりたえ）から八穂爾杵築（やほにきづき）の御埼（みさき）までである」と出てきます。

先ほど武田先生のお話の中に、出雲大社は古い時代は杵築大社と呼んでいたとありました。ここでは、それは八穂爾杵築と出てきます。八穂は褒めたたえるという意味を持っており、杵築の御埼、すなわち現在の出雲大社の近くの日御碕（ひのみさき）を指しています。「国引き神話」によれば、この地域は「新羅の三崎」を引いて来たのであるということです。荒唐無稽な話ですが、「こうして（引いて来た国をつなぐために）、固く打ち込んだ舟

繋ぎの杭は、石見の国と出雲の国の堺にある、名を佐比売山（さひめやま）（現在の三瓶山）というのがすなわちこれである」と書かれています。「また手に持って引いた綱は、菌（その）の長浜がすなわちこれである」。すごく広大な話です。日御碕からは三瓶山が手にとるように見えます。出雲大社があるところの島根半島西部の先端部が日御碕です。

「また、北門の佐伎（さき）の国を、国の余りがあるかと見ると『国の余りはある』と仰せられて」とあり・・・この後は前と同じ文章が繰り返かえされているので省略します。佐伎の国の余りを引いてきたのが、「多久（たく）の折絶から狭田（さだ）の国、すなわちこれである」という。また、「北門の農波（のなみ）の国」の余りを引いてきたのが、「宇波（うは）の折絶から闇見（くらみ）の国まで、すなわちこれである」という。次に、これは私がこの神話を取り上げるきっかけとなったものなのですが、「高志（こし）の都都（つつ）の御崎を国の余りがあるかと見ると、『国の余りはある』と仰せられて」、引いてきたのが「三穂（美保）の御崎である」と記されております。

この「国引き神話」は、神話時代のことで荒唐無稽な話だということで、研究者の間でほとんど無視されていた時代もあります。しかし、『出雲国風土記』は非常に丁寧に書かれています。当時なりの伝承検討もされていて編さん方針がしっかりとしています。例えば郡の名称の起りについては、意宇郡から始まり、島根郡、秋鹿（あいか）郡、楯縫（たてぬい）郡という具合になっています。すなわち、現在の郡名でいくと、島根半島を左回転できちんと、記述スタイルが整理され統一されております。

また、今ほど述べた「国引き神話」では、まず、引いた地域（国）と「着縫うた国」、それがどこから始まってどこで終わっているかということが明確です。朝鮮半島の新羅から「三崎」を引いて、引っ張ってきたのが、去豆（小津）の折絶から八穂爾杵築の「御崎」までとしています。ここでは、「三崎」（岬）から引いて来たのが八穂爾杵築の御崎（岬）なのだと知っているわけです。次に、北門の佐伎の「国」を引いて来たのが狭田の「国」までと書かれています。そして、北門の農波の「国」を引いて来たのが闇見の「国」までとあり、高志の都都の御崎（岬）から引いて来たのは三穂の崎（岬）であるというように、それぞれが対応しています。要するに、御崎から御崎（岬）を引いて来て、国から国を引いて来たとしている。また、引っ張るための綱を結んだ杭を原文では「加志」と書いてい

ます。加志とは、海人の用語です。このようなことから、「国引き神話」は出雲の遠隔地にある地形を非常に詳しく知っている人の知見を背景にしており、それは海から見た視点、すなわち海人族の視点でもって記されていると思われれます。



2. 神話が描く地理的な世界

次に、私が今考えている、それぞれの国の入り口と領域をお話します。新羅の国から引いて来たと言われているのが、現在の島根県出雲郡になります。これは出雲大社のある杵築の御埼が目安になります。それから、北門の佐伎は狭田の国までとあります。秋鹿郡に佐太神社がありますので、ほぼこの領域だろうと出来ます。子細には秋鹿郡と一部楯縫郡を合わせた地域を表現したものでしょう。そして、闇見の国とは、加賀の潜戸（かかのくけど）という海岸洞穴のあるところですが、洞穴は、暗い世界であるといったことから、それが闇見の国という名称に表れたのでしょう。それから、高志の都都から引いて来た三穂の崎は現在、島根半島東端に美保神社が鎮座していることから、その領域ということになります。

つまり、「国引き神話」はでたらめに書かれたものではなく、島根半島を逆さ地図で見ると、この神話は島根半島の形成史を右側から順番に規則正しく整えて表現した話だということになるかと思えます。そうしますと、この神話が描いている地理的な世界は壮大なものとなります。島根半島から言えば、新羅の三崎を引いて来たという話が書かれておりますので、これは現在の韓国慶州の海岸域に想定できるかと思えます。それから、中間の北門の佐伎の国や北門の農波の国は現在の隠岐の島であると言われております。これに高志の地域を加えたところまでが、「国引き神話」が示している地理感です。島根半島の海で生活の生業をし、交易活動を行っていた海人たちの視野には、遠く朝鮮半島、そして高志の国までが入っているということになります。

距離を測ってみると、島根半島から新羅までは直線で約 360km です。一方、島根半島から高志（能登）までは約 420km あります。ということは、島根半島に住む人々にとっては、新羅の国のエリアは非常に身近なものに感じられているということで、同じ距離を航海するだけであれば、私たちが住んでいる高志の国よりもより近い距離にあると言えるわけです。

3. 島根半島と能登半島の交流

それでは、彼らはどのように彼の地の知識・認識を得ていたのでしょうか。島根半島と能登半島に関する考古学資料からの交流を見ておきたい。

島根県松江市の美保関の先端には式内社美保神社があり、それと対応するものとして、能登半島の先端、石川県珠洲市三崎町に式内社須須神社があります。山伏山の頂上にある



奥宮には、美穂須須美命が祭られている、すなわち出雲の“美保”の神様がここに祭られているということです。両社は、いずれも半島の先端域に鎮座しています。共通する立地形態を考えると富山湾を囲んだエリアと美保湾を囲んだエリアとはほぼ同じ環境を有しているように見えます。

美保神社の拝殿（松江市）



須須神社の拝殿（珠洲市）

一方、能登特有の製塩土器があります。底部が棒状になったもので「能登式製塩土器」の名がついています。それが島根県的美保関に所在する伊屋谷遺跡や郷ノ坪遺跡という6世紀代ごろの遺跡から出土しているのです。島根半島の、特に美保関と、能登半島の珠洲の地域とが緊密な相互交流を行っていたということが分かります。

それから、カマド形土器と呼ばれているものがあります。これは普通の土器のように見えますが、実はこれは、朝鮮半島から

渡来した移動式のカマドなのです。この土器は渡来系の人々が用いたとされ、神様への供物などを煮炊きする神聖な炊飯具です。島根県出雲郡の日御碕にある「おわし遺跡」から、こういったカマド形土器が出ているのです。そして、能登半島の富来町（現・志賀町）の高田遺跡でも出ています。このようなカマド形土器が出ている地域は、日本海沿岸域では出雲、伯耆、丹後、能登、佐渡に集中しています。越中（富山県）では最近、立山町の利田横枕遺跡でも出土しました。朝鮮半島から渡来した人

次に能登半島の横穴墓の分布を見てみます。能登半島の珠洲の地域に岩坂向林横穴墓をはじめ幾つかの横穴墓がありますが、6世紀末から7世紀の横穴墓は、出雲の地域でも美保関町にある横穴墓と造り方が極めて共通しています。玄室が「家形」形式を成すのです。これは出雲系の横穴形式が能登へ伝播したものと言えます。

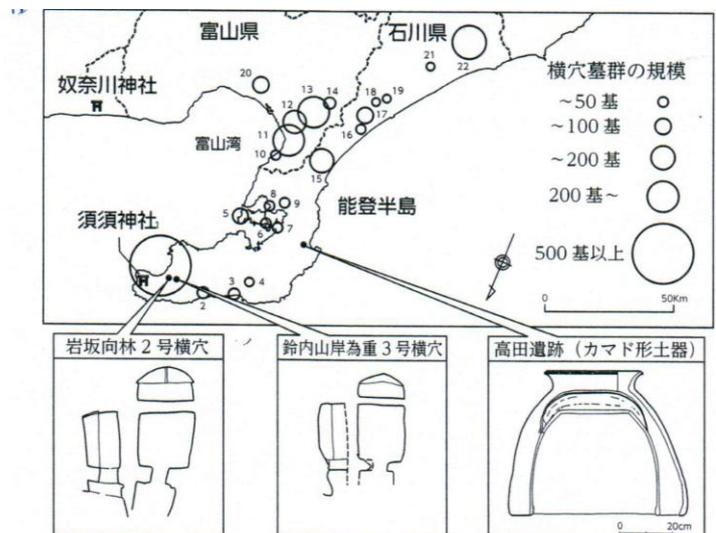


図4 ⑤神話の地域図と後期古墳などの分布

図1 能登半島の図

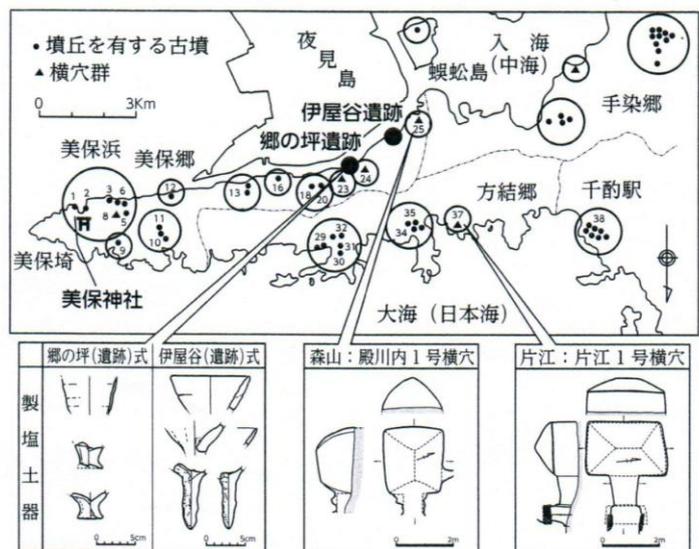


図5 能登半島の横穴墓などの分布

島根

図2 出雲半島の図

たちが、このようなカマドを携えて移動していると考えられます。この土器の分布、すなわち移動の痕跡は、古代の人々が盛んに日本海を結ぶ活動をしていたことを示しているようです。仮に『越中国風土記』が残っていたとすれば、「国引き神話」と同じように日本海に目を向けた豊かな記述が成されていたであろうと想像しています。

4. 風土性の伝承

最後に、日本海沿岸域が有する土地の風土性について事例を挙げておきます。文政 8 年（1825 年）に、新潟県柏崎市宮川の浜に 1 本の木材が流れ着きました。それを近隣にある椎谷の漁師が見つけ、薪にしようと思ったのですが、ある庄屋さんが「これは大事なものであるから」と言って引き取り、現在、柏崎の山手にある「名勝貞観園」の中心建物で展示されています。



「娥眉山下橋」銘の橋桁

これは表面を見ると、「娥眉山下橋」と書かれています。娥（峨）眉山というのは中国四川省にあり、中国三大霊山（ほかに五台山、天台山）の一つとして有名な山です。峨眉山から流れ来る河川の橋桁とされておりま

す。かつて良寛さんが刻まれた文字を見て、非常に感銘を受け「詩歌」に詠んでいます。柏崎の浜には、こういった中国大陸に関係したようなもの、あるいはこの木材は朝鮮半島に由来するチャンスンではなかろうかという説もありますが、いずれにしろそれには「娥眉山」の文字が鮮明に刻まれています。

それから、良寛さんがいた国上山（寺泊町）の麓には竹ヶ花という村落がありますが、ここに「新羅王碑」があります。明治 35 年に建てられた石碑は、新羅王とその一族がかつてこの浜に漂着してこられ、王がこの土地で亡くなられたので、それをしのぶために建てられたものです。この石碑の地は現在も村人が手厚く墓守をしています。こういった風土性が、新潟県の柏崎や周辺地域に現在も脈々と語り継がれているのです。



新羅王の碑

(今村) 藤田先生、ありがとうございました。藤田先生からは、文献や遺跡から見た古代の日本海の交流というお話をいただきました。朝鮮半島、そして島根半島、能登半島に同じような遺跡があるということ、また、島根県から見れば高志の国よりも慶州の方が近いということを考えますと、近代国家の中での国家や国境の概念というものが何なのかということ、もう一度考えなければいけないという気がします。

それでは、次に小野先生から、日本海的环境保全ということでお話を頂きたいと思えます。内輪の話になりますが、私ども富山大学極東地域研究センターも、1997年のナホトカ号の重油流出事故を受け、それまでの経済からの地域研究をしていた研究センターから、今は経済と環境の両面から考えるセンターになってきています。その面でも、日本海をめぐる環境の問題は非常に重要ではないかと思えますので、小野先生、よろしく願いいたします。

報告2「日本海的环境保全」

小野 洋 氏 (環日本海環境協力センター (NPEC) 専務理事)

(小野) 私は環日本海環境協力センターで、日本海を中心とする海的环境の保全の仕事をしております。また、併せて、県の生活環境文化部にも籍を置いていて、今日のテーマは「海がつなぐ文化と環境」ということですので、海的环境保全と生活環境文化部というところをつなげると、私が選ばれたのかなという主催者の連想ゲームが想像できます。お呼びいただきまして、本当にありがとうございます。大変光栄に思っております。



最近、たまたま新聞で外交に関する世論調査を見て、興味があったので、中国、韓国、ロシア、米国の4国で、親しみを感ずるか感ずかないか、数字を調べてみました。最近、中国、韓国、ロシアも含めて、いろいろな国際的な問題があります。全国調査では、親しみを感ずるという方が中国で約18%、韓国で約40%、ロシアで約22%です。片や、親しみを感ずないという方が中国で約80%、韓国でも58%、ロシアで約75%です。さらに、北陸地方を分けたデータがあるので見てみますと、近いので少し親しみを感ずる方が多いのかなと想像していたのですが、数字を見ますと、中国は同じぐらいなのですが、韓国、ロシアは親しみを感ずる方はかえって少なく、感ずないという方がむしろ多い数字になっています。とはいえ、お隣の国の位置を変えるわけにはいきませんので、こういう中でどのように交流、お付き合いをしていけばいいのかという問題に直面していると感じています。

1. 環日本海環境保全への取組

環日本海環境協力センターは、簡単に申し上げますと、環日本海的环境保全に貢献する

ことを目的としています。国連、政府、自治体等とかなり幅広いレベルでの連携・協力をして海洋環境保全事業を展開する。このような仕事をさせていただいています。

活動を細かく言いはじめると切りがないので、新聞記事でご紹介します。例えば藻場です。三陸では、津波の影響で藻場が根こそぎ破壊されてしまいました。その状況を調べて、どのようにして復活すればいいのかという仕事をしています。それから、海岸漂着物を使ってアート制作をして、普及啓発といいますか、海洋ごみについての理解を深めていただくというものもあります。その他、子どもたちも参加するごみの清掃活動、ちょうど中国の遼寧省の方がおみえになったときに行った国際環境協力活動、国際会議関係の仕事などがあります。

なぜ環日本海の環境協力をしなければいけないのでしょうか。ここには日本だけでは解決できない問題がたくさんあります。ご承知と思いますが、例えばナホトカ号の事故による油の流出、海洋ごみは国境を越えた問題になり得ます。それから、最近、流行語大賞の候補にも入っていた PM2.5 という微小な粒子による大気汚染もあります。よくテレビ等が出ますが、北京では非常に汚染された状況が続き、黄砂とともに汚染物質が季節風に乗って日本の方に流れてくるのではないかということも心配されております。このように、この地域には日本だけでは解決できない問題がたくさんあります。

ただ、そういった国をまたぐような話は、やはり国連や政府の役割ではないかということになってきます。国連や国の活動ももちろんあります。世界中で国際的な海域があり、日本海もその一つですが、ちょうど昨日まで会議もやっていましたが、国連の枠組みの下で国際的な取組が行われております。日本海では、日・中・韓・露が集まって、海洋環境保全の枠組みがつくられています。私ども環日本海環境協力センター（NPEC）もその一翼を担っていて、海洋ごみについての報告書やパンフレットの作成、その他、生物多様性などのさまざまな活動に貢献しています。

ただ、幾つか課題があります。国境を越える環境問題であれば、最終的には国同士で解決を図る必要がありますが、国レベルで見ますと、領土問題などのさまざまな外交課題もあります。国連などでは、レポートをたくさん作りますが、全部英語で書かれていて、現場で英語の分厚いレポートを読むというのも現実問題としてなかなか難しい。そのように、いろいろな課題があると思っています。

では、私ども自治体としてできることはあるのかということになってきます。富山県でもさまざまな取組を実施しています。これは国レベルの枠組みではなく、日本で言うと県、韓国で言うと道、中国で言うと省という自治体間レベルでの取組のための会議があり、22の自治体が参加して、富山県がコーディネート自治体になってさまざまな取組をしております。例えば、海辺の漂着物について見ると、さまざまな地点で共同調査をしており、参加数もどんどん伸びています。昨年度は、3カ国の15自治体33海岸で、実際に調査が実施されているという状況です。子どもたちにもたくさん参加してもらっていて、日本、中国、韓国、ロシアそれぞれの海岸で、漂着物調査が行われていて、科学的なデータもかなり蓄積されてきています。



海岸漂着物調査

海洋ごみの他にも、例えば黄砂の問題の共同調査や環境技術者の研修活動など、さまざまなことが行われています。

ただ、地方自治体間の協力にも課題があります。良いところとしては、非常に現場に近い立場にいるので、地に足の着いた課題設定ができることです。それから、国同士の外交問題からある程度距離を置くことも可能で、外交問題によって全く交流が途絶えてしまうことは避けられます。ただし、影響は大きく受けます。一方、自治体レベルということになると、もともと国際協力が本来の任務ではないということもあって、高度な技術や高額な予算が必要な活動は、おのずから限界があります。それから、本地域には共通言語がなく、どの国も英語が母国語ではないため、どうしても現場で日常的なコミュニケーションに支障を来すというか、難しい場面があります。

2. 異文化コミュニケーション

今日の話題は環境と文化ということですので、無理矢理そちらの方に引きつけてみました。われわれは4カ国の子どもたちを集めて、北東アジア青少年環境活動体験プログラムという取組を行っています。これは日・中・韓・露の子どもたちが、毎年異なる国に集まって合宿し、環境保全体験活動をするというものです。清掃活動などの体を動かす活動もあります。先ほどの武田先生の話ではありませんが、日本の着物を着てみるということもありました。服を着ることが相手に敬意を表すことになると思図してやったわけではないのですが、無意識にこういうものが選ばれているというのは示唆的なのではないかと思えます。

北東アジア青少年環境活動体験プログラム (2013.8 韓国江原道)



青少年環境活動体験プログラム

今年、韓国で行われた活動は、皆で一緒に何かをするということが中心になって行われています。この体験プログラムとは別に大人の方の活動もあり、自治体やNPOの方をお招きし、いろいろな活動をしました。漂着物アートを実際にやってみたり、植樹をやったりしています。ロシアの漂着物アートの作品ではラクダがモデルになっていて、海が砂漠にならないよというメッセージを込めてあるそうです。韓国の作品は魚で、海が汚くて住めなくなり、空に逃げってしまったということを表現しています。これはどういう意味か分かりませんが、ピエロもあります。それから、やはり外国の方も宇奈月温泉の足湯は大変好きだということが分かりました。

北東アジア環境活動交流会(2013.10富山県)



漂着物アート作品

それを基に、今日のテーマに沿って青少年交流の文化的考察をしてみます。まず、共通言語がないという問題があり、片言の英語や身振り手振り、最近ではインターネットの翻訳ツールなどを使ってコミュニケーションを取っていますが、やはり最初は非常に戸惑い大きいという感じがしました。ただ、環境意識を見ると、かなり共通点が多いと思います。漂着物アートではメッセージを考えてもらうのですが、そうすると割とどこの国も同じようなメッセージが出てきます。確かにお国柄があつて、活動参加に積極的に入り込んでくるところ、そうではないところといろいろありますが、環境保全ということについては、恐らく子どもの方が大人よりも共感度が高いのではないのでしょうか。

従って、環境というのは国際交流のテーマとしては非常に有効ではないかと考えております。ただ、言葉の問題があるので工夫が必要で、漂着物アート、動画、絵画などの制作といった言語によらない手法を活用すると有効であるという気がします。これは最初の武田先生の話にもありましたが、われわれはあまり理屈は考えていないのですが、これまでの交流の歴史や昔からの交流の手法をよく調べて勉強すると、何かいいアイデアが出てくる

のではないかと触発を受けたところです。

さらに協力を進める上での課題としては、今、自治体レベルでの協力がなされていますが、やはり自治体だけでは足りず、NPOや市民団体など、市民のレベルでの協力が必要になってくると思います。地方自治体は比較的現場に近いのですが、必ずしも直接活動を行っているわけではありません。そこで、現場で活動し



ている環境 NPO や市民団体との連携・協力が非常に重要になってくるでしょう。さらに、そういった環境 NPO や市民団体同士の国際交流が広がれば、非常に層の厚い協力になり得るのではないかと思います。自治体には、こういった協力を促進する役割もあるのではないかと最近考えています。

やはり海の恵みは共通財産ですので、われわれとしては、さらに頑張っていきたいと思えます。また、先ほどの文化の話ですが、交流のための何かヒントになることがあれば、ぜひご示唆を頂ければ大変ありがたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

(今村) 小野先生、どうもありがとうございました。環境問題というのは地球全体の問題ではありますが、具体的な解決策としては、地域の問題に関わってくるだろうということでした。そして、その中で青少年たちの交流も非常に重要になってくるのだというお話だったのでないかと思います。

ディスカッション

(今村) それでは、パネルディスカッションに行く前に、休憩の前にフロアの方から武田先生に質問があればということで質問を頂いたのですが、お答えいただけるものがあれば、お願いいたします。

武田佐知子 氏 (大阪大学大学院文学研究科 教授)

(武田) 3通、質問を頂いています。まず、日本海学発表の動機を知りたいというご質問がありました。私の場合は、今日も中心的に話をした斉明紀6年の阿倍比羅夫の遠征記事の中に、衣服を着用して帰って、それをまた脱いだという記事を最初に見つけたときに、私は服装史が専門でしたので、このことと国際関係と民族の問題を重ねて論じてみたいというのがあって、それが必然的に日本海学につながっていったわけです。



それから、北九州の海女の非常に緊密なネットワークを『万葉集』から抽出したときに、遣唐使の派遣などの際、現実に舟をこいで済州島や韓国に渡って中国に行くのは、緊密な海人たちのネットワークがあってこそだったということから、海人たちのネットワークがどのような広がりを持っているのかに興味を持ちまして、これもまた日本海学につながっていったわけです。

最後には、先ほど話した淳足柵が、中央ではどのように捉えられているかということ、非常に大きな人工的構築物である可能性があるということ、これはやはり出雲大社とも結び付くだろうし、さまざまな日本海側の大規模高層建築に結び付いていくのではないかということで、何もかもが日本海に収斂(しゅうれん)していくという感じでやってきたということがあります。

2番目に、「日本海側の港の特色として河口港を挙げて、その利点を幾つか挙げられましたが、河口港であるが故の欠点はありませんか」というご質問があります。これは比較的近現代の問題で、河口港には必然的に砂が堆積しますので、絶えず浚渫(しゅんせつ)しなければならず、港湾維持の面では大変手が掛かるということがあります。もう一つは、貝が非常に付着しやすいという話を聞いたことがあります。これが河口港であるが故の欠点だろうと思いました。

3番目は非常に難しい問題で、「海を通しての交易を考えると、日本海だけではなく、ランドマークしての大きな建造物は中国や韓国にもあったのでしょうか。エーゲ海で言えば、ギリシャのパルテノン神殿にもそういう意味がありますか。ギリシャ神殿の周りにも古代には森があったとどこかで読んだことがありますか」というご質問ですが、これは私はお手上げで、先生に聞きたいところなのですが、韓国、中国ではどうでしょうか。こうした

大規模構造物が海岸線にあるのでしょうか。私自身、エーゲ海のことにも引用しながら、そういえばきちんとこの問題も論じるべきであったと思ひまして、今回の講演で皆さまに宿題を頂いたという思ひです。

(今村) ありがとうございます。また武田先生にお聞きして申し訳ないのですが、淳足柵は新潟の方であったのだらうということですが、せっかく今ここ富山の地でお話を頂いておりますので、淳足柵を中心とした交易圏の中で、この辺りの地域がどのような役割を果たしていたのかということ、どのように考えればいいのでしょうか。

(武田) すごく長いレンジで考えますと、先ほども少し言ったかと思いますが、能登半島にあった真脇遺跡などは縄文時代からなのですが、すごくさかのぼって考えていいと思います。ああいうものにも一種のランドマーク的な要素があったのではないかと考えています。それから、古代ではやはり越中国府のあった伏木は、家持などが行った古代の政治の中心地であったのですが、ここも小矢部川の河口に栄えた河口港で、これは古代だけではなく、北前船の舞台にもなり、富山の漢方薬を買い入れるために中国に行った昆布ロードを形成していたという話もあります。では、ここがランドマーク的にどうだったかという、伏木に高層建物があつたかどうかということは全く資料もないので分かりませんが、ランドマークとしては、後ろに二上山があるということで、日本海を航行する舟からは非常に識別しやすいところでした。ですから、ここも淳足柵ほどではないにしても、大いにそうした拠点になっていたということは考えられるのではないかと考えています。それから、中世に非常に栄えたという放生津潟にも港があつたようです。やはり一つに限らず、日本海沿岸にはたくさんの施設があつただらうと想定しています。

(今村) ありがとうございます。私は現代のことをやっていますので、門外漢の私から見ると、武田先生と藤田先生はお二方とも古代の遺跡を研究していらっしゃるということで、もしかすると専門の分野だと遠いのかもかもしれませんが、お互いにコメントなり質問なりがあればしていただければと思います。

(藤田) 先ほどの私のプリントを、少し追加して話したいと思います。時間の関係で省略した箇所があります。朝鮮半島で出ている日本列島の遺物に関してですが、これまでさまざまな言い方で日本列島にどういったものが入ってきているかということ、考古学的に報告したり話したりする事例が多いかと思っています。一方で、それでは朝鮮半島や中国で日本の遺物は出ているのかということ、つまり逆を一度整理しておかなければいけないと思います。「国引き神話」で言えば、新羅の三崎を引いて来たのが杵築の御崎であるという表現があります。そこで新羅と島根半島との関係に触れてみたいと思います。朝鮮半島の古代国家、ここでは4世紀末の話になりますが、高句麗、新羅、加羅



(伽耶)、それから百濟という四つの国が台頭しています。先ほどの武田先生の『日本書紀』の話にもありましたが、それぞれが日本列島の文化と深く関わっています。それらの国の中で、特に「国引き神話」では、島根半島西部域の新羅との御崎を記しています。そこで島根半島西部域は、新羅の文化と特別な意識で結ばれていたという見方ができるのではと推測するのです。けれども、日本列島に出ている考古遺物から、ピンポイントでこれが新羅から来たものだ、これが伽耶から来たものだとすくい上げるのは、なかなか至難の業です。そういった隔靴搔痒の事情もありますので、ここでは大ざっぱではありますが韓国で出土している日本列島からの遺物を見ておきたいと思うわけです。

韓国出土の倭系遺物

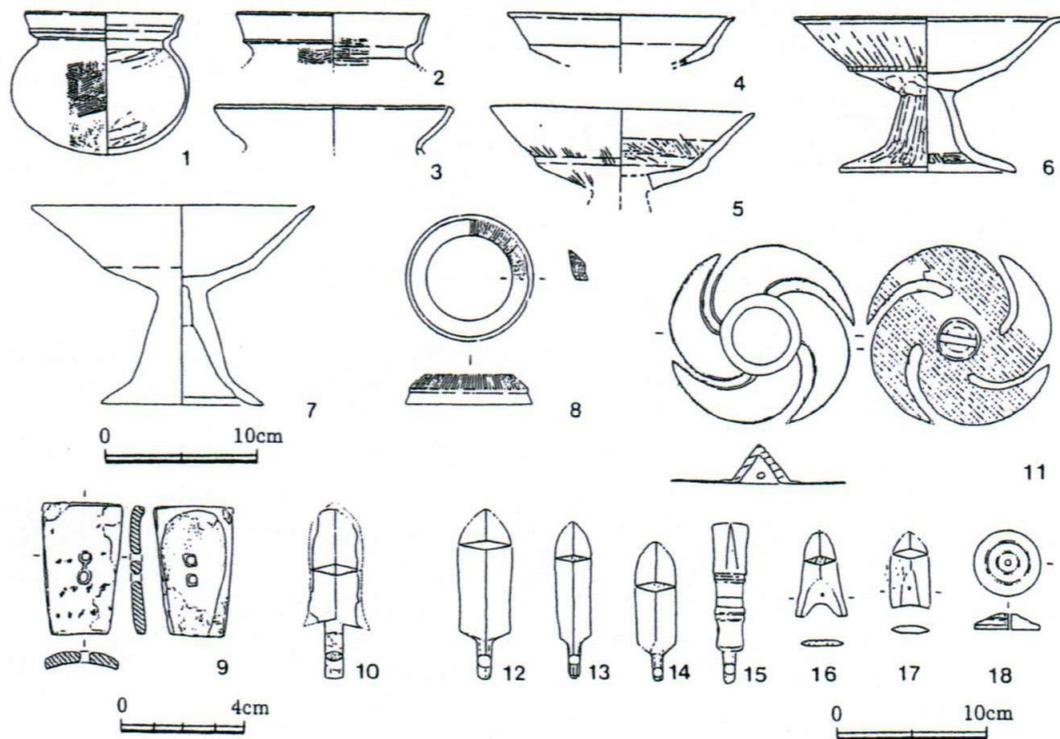


図1 4世紀～5世紀前半の韓国出土倭系遺物

1～7: 土師器、8: 石劔、9: イモガイ製貝符、10: 銅鏃、11: 巴形銅器、12～17: 鏃形石製品、18: 紡錘車形石製品 (1～3: 東萊貝塚、4～6: 龍院遺跡、7: 果洞 8 号墳、8: 月城路 ka-29 号墳、9: 礼安里 77 号墳、10: 三東洞 2 号石棺墓、11～17: 大成洞 13 号墳、18: 大成洞 18 号墳)

図3 韓国出土の倭系遺物 (高久健二氏 2002年より)

主に朝鮮半島南部、先端部の伽耶の地域から出土しているものが大変多いです。それから、百濟の地域と一部新羅から比較的出ています。概算ですが、プリントでは主に4世紀から6世紀の遺物が示してあります。朝鮮半島で出ている日本列島関係では約80の遺跡から出土しています。それは大きく二つの時期に分かれます。一つは4世紀から5世紀前半の遺物、それから5世紀後半と6世紀前半の遺物、この二つの時期に分かれます。なぜか5世紀の中ごろの遺物は希薄です。この時期は一休みの時期なのでしょう。

それでは、「国引き神話」を残した山陰の人々、出雲系の海人たちはどういう時期に活動

しているのかというと、4世紀から5世紀前半の段階です。プリントの1~6の土器の形態・形状は、山陰に特有なものを含んでいます。従って、これは山陰の海人の活動期の所産であろうと思われます。ただ、4世紀から5世紀前半は、西日本を中心に比較的各地のものが朝鮮半島に行っているようです。一方で、主に5世紀後半から6世紀前半には非常に統一されたものが入っていています。しかも、勾玉（まがたま）形をしているものは祭祀用の道具です。こういったものが朝鮮半島に入っている。5世紀後半から6世紀前半は、大和政権による交流が統一的行われていた時期であろうと考えられています。日本列島のものが古代韓国に伝播していて、先ほど一例として紹介しましたが、古代韓国のカマド形土器を携えた人々が日本列島に入ってきているという事象がうかがえます。

（今村） ありがとうございます。われわれが子どものころの歴史というと、文化というのは中国から朝鮮半島を伝わって日本に来たというように、ある意味では一方通行の文化だと習っていたのですが、実は交流があったのではないかとということで、本当に海がつかないでいた文化なのだとということがしみじみと分かるお話でした。武田先生の方から。

（武田） 藤田先生に質問です。私は国引き詞章が大好きで、暗記するくらい好きでした。国引き詞章という荒唐無稽な話と考古学出土遺物を見事に結び付けたすごく説得的な所論だったと思うのですが、『出雲国風土記』に国引き詞章という形で多文化の影響があり、非常に多くの地域の文化の統合体のような形で『出雲国風土記』が描かれているということは、出雲だけの特色ではないのかどうかということです。『出雲国風土記』の文学性があまりにも高かったからこうなったのか、他に同じように「風土記」が編さんされたらどのような形になったのだろうか、これも難しい話ですが、お伺いしたいと思います。

（藤田） 考古学と歴史資料との接点のようなものを求めながら、今日発表させていただいたのですが、日本列島では例えば丹後半島にも、古墳時代（4世紀代）に朝鮮半島からダイレクトに入ってきている文化があります。あるいはもう一つ、古くさかのぼれば、弥生時代、（3世紀）に陶埴（とうけん）というものがあります。こぶし大ぐらいの卵形をしていて、真ん中が空洞になっていて、孔が4つほど開いていて、吹けば音が出る笛です。これは古代中国で、神様を祭るときに使われている道具です。そういったものが日本海沿岸の島根県や丹後半島の地域で集中的に出土しております。そういったものを持っている人たちが直接入ってくるのが日本海沿岸です。

それから、例えば鉄の文化は日本列島の農耕社会を切り開き発展をもたらしたと言われていますが、日本列島で鉄器を早くに九州や半島などから持ち込み、この土地でも造り、大量に使用していたのは、先ほども武田先生が話された弥生時代後半ごろの妻木晩田遺跡、あるいは鳥取県の青谷上寺地遺跡など、日本海沿岸の山陰地域です。

そして能登の地域にも、大陸文化との関連を示すものが散在しています。考古学以外では、例えば久麻加夫都阿良加志比古神社や、その近くにある藤津比古神社には大陸渡来の、ひょっとしたら新羅系かとも言われているお祭りが見られます。

また、先ほど肅慎の話が出ましたが、佐渡は肅慎が漂着したと『日本書紀』に記されている重要な土地です。大陸文化との交流を示す事象や痕跡がこれらの地域に残っています。

(今村) どうもありがとうございます。それでは、小野先生にお尋ねしたいのですが、先ほど内閣府の世論調査の数字が出ました。私もあれはよく使わせていただくのですが、例えば韓国との関係ですと、ずっと親しみを感じない人が多かったのが、日韓のワールドカップの共催や韓流ドラマブームの影響で親しみを感じる人が急速に増えていった。ところが、最近はそれがまた非常に少なくなってきました。

今年9月に韓国に行ったときに、今までは繁華街などを歩くと日本語での呼び込みがたくさんあったのが、完全に中国語の世界になっているのです。中国のお客さんばかりになっていて、それぐらい日韓が冷え込んでいるのかと思って愕然（がくぜん）としました。しかし、そんな中でも、今年5月、日中韓の環境大臣の協力会議があって、環境大臣同士が握手をしている写真が出ました。環境問題は地球規模で考えなければいけない問題ですし、技術的なことと言えば、まだ日本の技術の方が進んでいる面があるのではないかと思います。こういう状況だからこそ、環境をブレイクスルーとするような試みはあり得るでしょうか。



(小野) ありがとうございます。いろいろな外交問題があると思うのですが、環境は割とみんなが合意しやすいものではないかと思います。海もそうですし、大気もそうなのですが、つながっていますので。一大気のPM2.5や黄砂の問題もそうですし、海では油などのいろいろな汚染がありますから、お互いに無視できないというか、いや応なく協力せざるを得ないという状況があります。また、環境の場合は生々しい外交問題的なものが出にくいので、比較的協力しやすいし、以前中国へのODAが必要かという話がありましたが、環境ODAについては別格的で、環境協力はいいのではないかと、日本のためにもなり得るということで非常に理解が得やすいということがあります。

このようにいろいろな問題で冷え込んでいるときこそ、環境問題を一つの突破口にしてということは大いにあり得ると思います。それから、現場レベルで自治体間での交流、付き合いが多々ありますが、そういう中ではあまりぎくしゃくという感じはなく、実際にいろいろな話をしたり一緒に活動したりする中では、ほとんどそういう感じはありません。ただ、国というものを背負ったりすると、どうしても身動きが取れないということがあるでしょうから、国家同士の付き合いだけではなく、自治体やNGO、市民レベルでの付き合いをより重層的に確保しておくことが非常に重要なのではないかと考えております。

(今村) ありがとうございます。では、あともう一回りぐらいだと思いますが、武田先生と藤田先生には、古代の交易から見た日本海のお話を頂き、小野先生には環境をめぐる日本海の交流の話を頂きました。今も出ていましたが、現在の北東アジア、日本海をめぐ

る地域のありようは、必ずしも良くありません。これはもちろん「日本海学」シンポジウムなので「日本海」という言葉を使っていますが、皆さんご承知のとおり、「日本海」という呼称自体が争いのもとになっています。ある韓国の大学が、「日本海学」に非常に興味を持ってくださって、角川から出している『日本海学の新世紀』シリーズを全部翻訳して韓国で出版したいという話になりました。でも、呼称の問題をめぐって日本も韓国の政府も出版を認めず、せつかくお互いの文化を知り合えるチャンスを逃したことがありました。

あえて「日本海」という言葉を使いますが、文化というものが日本海を結ぶ役割を何とかして果たしてくれればと思っています。武田先生と藤田先生から、温故知新といえますか、いにしへの教えから、現代の北東アジアの交流、あるいは人と人とのつながりや交易・交流のためには何が重要かということ、最後に一言ずつお話しいただければと思います。今、小野先生から重層的な在り方があるとお話いただきましたが、ではその中で、市民レベルの目から見て、地方自治体や国をどうやって利用していけばいいのか。市民レベルの目から見て、海外の中国や韓国との交流をどのようにしていけばいいのか、環境の側面から一言頂ければと思います。

(武田) 名称で相いれないというのは、入り口に至る前に駄目という感じで、愕然とする思いなのですが、古代の例から学ぶとすれば、やはり利害の一致点を見つけることです。粛慎との関係にしても、阿倍軍との関係にしても、蝦夷との関係にしても、民族間がここのなら妥協できるということで、お互いを尊重しながら妥協点を見つけていく。これは非常に難しいことなのですが、利害の一致点をどうにかして探すということではかないような気がします。

(藤田) 「日本海」という呼称はもともと17世紀初頭にマテオ・リッチが作成した地図(坤輿万国地図)に見えるのですが、そこに、今日、さまざまな問題や地図表記の問題がからんできています。以前、古代史関係のシンポジウムに韓国の研究者をお呼びしたときに、「日本海」では出席できないということで、日本海の横に「東海(トンヘ)」を付記して打診したところ、韓国の大使館もそれならよろしいでしょうと。これはある大学の国際シンポジウムでのことで、双方きちんと合意ができて研究交流ができたという事がありました。

先ほども一端を紹介したのですが、現代の日本列島には渡来文化の名残りが各地にあります。国上山の麓の竹ヶ花という小さな集落では、明治35年以来(恐らくはそれ以前から)、土地の人たちが集まって、毎年6月に新羅王の祭祀を行っておられます。あるいは「峨眉山下橋」という橋の木柱が文政8年に柏崎に流れ着いたのを記念して、仏教学者の柳田聖山先生が、峨眉山の麓のお寺(万年寺の清音閣)に良寛さんの石碑(詩碑亭)を建てたということがあって、これが中国四川省の方々の心を打ったということもあります。

それから、日本で言えば、霊亀2年(716)に武蔵国の高麗郡に、それまで各地に分散していた高句麗系の人たち(主に亡命渡来人)1799人が移住して一郡を成し、大きく渡来文化の華を開かせました。そこには今日、高麗神社という神社があり、政治家や企業家が参拝すると出世するということでも有名です。先日もそこに行ってきたのですが、韓国からの修学旅行の方々がバスを連れてたくさん訪れておられました。

そういった日本列島の中にあるさまざまな渡来文化の遺産をきちんと掘り起こし、尊重しながら、市民レベルでの文化交流を礎として、やがて大きな交流につなげていけばいいなと思います。そのためにはもちろん地道ですが文化史的な掘り起こしを丁寧にやる必要があると思っています。



高麗神社のたたずまい

(小野) われわれも国際的な枠組みで仕事をしていると、呼び方の問題というのは非常に大きな問題になることがあります。あるレポートを書こうと思うと、日本海をどう呼べばいいのかということになります。4カ国で何かりレポートを共同で作るときに、その場所を呼ばないわけにはいかないので、どのように呼べばみんなが納得できるのかということで苦労しています。いろいろな知恵はお互いあって、もし相手の国が受け入れられないような言葉を使うと、せっかく一生懸命積み上げてレポートそのものが世の中に出ないということになってしまうので、国としての立場は別として、実際の仕事を進める上では、日々いろいろと気を使っているという状況があります。

それから、市民レベルでどのように環境交流を進めていけばいいのかというご質問があったと思います。いきなり個人レベルで環境協力をというのは、恐らくなかなかハードルが高い部分があると思います。ですから、まずはあまり環境協力といったことは考えずに、観光旅行でも韓流ドラマでもいいと思うのですが、いろいろと知っていただくこと、実際に行ってみるということがまず重要なのではないかと思います。行ってみると印象が全然変わってくることが多いのではないのでしょうか。行って相手の国の人と話をしたりしてみると、印象ががらりと変わることが多いと自分では思います。最初にご紹介したように、かなりの部分が親しみを感じないという結果がありますが、これはマスコミの情報などのイメージで感じている部分がやはり多いのではないかと思います。せっかく近いところですので、ぜひ交流すべきだと思います。

それから、さらに進めて環境協力をしたいということであれば、自治体なり国なりがいろいろ準備している、参加できるプログラムが実はたくさんあります。われわれ NPEC も幾つかご紹介しましたが、一般の方が参加していただけるような活動プログラムがあります。また、国の活動あるいは大きな NPO の活動もありますので、ぜひまずは気軽にそういった活動に参加してみるというのが、われわれとしては非常に望まれるところです。どうしても最初の段階で尻込みするとか、言葉も通じないし、どうかなという感じがあるのですが、いろいろ工夫をして、言葉はあまり話せなくても楽しめるような活動も工夫しておりますので、ぜひそういうものを丁寧に探していただいて、見つけたら何でもいから気軽に参加してみるというのが、まず第一歩ではないかと思います。

(今村) どうもありがとうございます。最後にまとめろと言われたのですが、もとよりご高説をまとめるほどの力はないので感想になりますが、ご容赦いただければと思います。

まず、武田先生のお話にあった沈黙貿易は、争いを避けるための一つの知恵だったのではないかと思います。では、なぜ今は言葉が通じるのにそれができないのでしょうか。それから、技術力も高まっている今、交流がもっと



もっと盛んになり得るのに、心の中の壁があるのはなぜなのだろうかということに思いをはせなくてははいけないと思います。

それから日本海ということ言えば、日本海というのは逆さ地図でもお分かりのように内海です。内海であるが故に、ごみの漂着問題をはじめ、いったん環境汚染物質が流れ込んでしまうと、希釈作用が及ばないという問題も出てくるので、環境問題が非常に大きく現れてくる場所なのではないかと思います。だからこそ、われわれは環境問題に関して、市民レベルでは技術がどうのこうのということではできないかもしれないけれども、汚さないような努力をするということも大事だと思います。日本海をめぐることは、古代のロマンに思いをはせながら、現実の問題を考えていかなくてははいけないと思います。

文化も環境も人々の営みが生み出しているものです。環境というのは、もともとは自然環境 (natural environment) だったのですが、今日お話しいただいた環境問題は、自然環境に人々の営みや手が加わったことによって起こってきた環境問題だと思います。ですから、そういった人々の営みの中から生まれてきた環境ということ、人と人、あるいは文化と文化をつなぐ海を介しながら考えていかなくてははいけない。日本海を豊かな海、平和な海にしていくということ、そして豊かな海であり続けていくための知恵を、われわれは出していかななくてははいけないのだろうということを、しみじみと感じました。

本日のシンポジウムが皆さまにとってお役に立てば幸いです。長い時間どうもありがとうございました。